第五百廿五號目次

◎社　說

無常迅速愛者至美……有　美　生

「衣食の爲め」の福音……天　籟　生

◎女　學

田舍の娘……黑　光　女　史

巖上松……村　の　歌　人

新年の喜び……左　學　女

戀の歌……善　覺　の　子

特題料理……生　間　正　起

◎隨　感

犬ころし〇蘭洲の死後〇藝術の玄妙、常陸山〇

藤間勘左衞門

◎雜　錄

舍監の四ケ月（其五）……有　美

ベテレヘムの星……ゆ　り　ひ　譯

英領印度帝國（上）……横　井　時　雄

旅窓漫吟……金　子　筑　水

松濤百話（一）……正　起

ショウペンハウエル自殺論（下）有　美　譯

新年の不相婚……一　少　年

鬼一法眼の寅の卷……

◎新　文

◎時　事

近衞公薨〇德川公〇近衞家と德川家〇安井哲子女史〇嫉妬は女の疾か〇東京の關西式

田山花袋作
鏑木清方畫

春　湖

定價四十錢
郵稅　六錢

久しく創作に筆を絶ちし田山花袋氏の新作也、花袋氏の筆世已に定評あれども、此篇の如きは同氏未曾有の傑作にして文質に文瓊の珍品たるべきもの也、青春妙齡の男女の濃厚なる戀愛を描きて波瀾曲折極りなきの妙あり、美はしく優しき戀愛を寫す事は花袋氏の最も得意とする所にして、其妙本篇に至りて全く盡きたりと云ふべし。切に江湖青年子女の一讀を煩はす。

成女學校々監　嘉悅孝子著

家庭實用　**四季料理**（上の卷）

珍しき製本
定價十五錢
郵稅二錢

料理の本は澤山出ますが、家庭の實用に適するものは少ないので、嘉悅先生が理論と實際と研究して書かれたのが此書であります、新春の珍しい御馳走は此本に依らねば出來ますまい。

發行所　東京市神田區錦町二丁目　新聲社

新刊　**牧草論**　農學士小川二郎著　正價五拾錢

我國の過去現在を觀察するに牧草の問題は常に等閑に附せられ多數の人士此問題に想着せず、爲に家畜飼料の優等なるものあること無し。著者是に觀するところあり此書を著して天下に問ふ。幸に一顧を賜へ。

發行所　札幌區南三條四一丁目　札幌興農園

綺入雜誌　**初等英語**　毎月一回發行　一冊六錢

初學の英學者が獨修に利便多し

發行所　京都市佛光寺烏丸東入　東枝律書房

期日	前金		廣告料	送金
毎月一回（十日、二十五日發行）	壹冊定價　拾錢 半年分前金　壹圓四拾錢 一年分同　貳圓	代金は總して前金にて御注文ありたし〇年來引續き講讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之候〇但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し〇追て請求可致事是れ貴に不本意乍ら計算の煩はしき不得止次第に候間かれて御承知被下度候	一行（十七字詰）一回　前金拾錢 一段　同　三圓半 一頁（三段）同　九圓	送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし〇郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割増にて計算せられたし

大賣捌

東京　東京堂
西京　勉強堂
大阪　文淵堂

明治三十七年一月十五日印刷
明治三十七年一月十五日發行

發行兼編輯人　青柳猛

印刷人　布川孫市

發行所　東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地　女學雜誌社（特電番町千一番）

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍（新橋電話十八番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第五百貳拾五號
明治三十七年一月十五日發兌

社説

無常迅速、愛着至美

一切世間常住なく、昨は昨、今は今、今日の有は是れ明日の無にして、明日の有は是れ今日の無なり。無有時に緣りて處を異にし、この日この夜をかの日に傳へ、有無聯りて永久に通す。湯盤の銘に曰く、日々に新にして又日々に新なりと。天地何ものか新ならざる。萬物何か絶えず常なるを得るものぞ。地球は變遷し生物は進化し、人類は開化す。愚かなるものよ。人事の常なく人情の移り易きに觀して、徒に慨き憂ふるを止めよ。徒に悲み憤ほるを止めよ。無常は是れ宇宙の天則なるを知らずや。變遷は無常を意味し、進化は無常を意味し、文明開化も又無常を意味す。祇園精舍の鐘の音は是れ天則の響なり、沙羅双樹の華の色は是れ十方世界の色なり。此る天地の間に生を受け命をたもつ人の心の、豈に限なく常住なるを得べき。人よ知らずや、今日の友は是れ明日の敵なるを。故に、ショウペンハウエル以爲らく、敵に知らしむべからざることは、又總て之を友に知らしむべからずと。

愚かなるものは、人事の當該に惑されて、永遠の天則を洞察せず。是に於てか、失望起り落膽生す。人事の變遷に悟道し人情の移り易きに徹底せるもの、如何ぞ失望あらん如何ぞ又落膽あらん。失望の起る所因は天則に通達せざるにあり、人間を知了せざるにあり。日は過ぎ月は變り年は行く。人の心の、日と共に月と共に年と共に、過ぎ又變り又行く是れ本然ならずや。夫婦朋友親子主從師弟、是れ畢竟利害を同ふして相寄れるものなり。その破るゝや易々たるべく、破れて相仇視する素より其ところたりなむ。此くの如くにして、世の人と人とを結ぶに當り、最も弱きものは利害なり。崇拜と尊敬とも、又人と人とを結んで大なる力あるものに非ず。あゝ唯

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

それ愛乎。愛は力なり。愛は萬面至るところとして常住なき世間にありて、唯一つの連鎖なり。人を『今の時』に結び、昨日をも今とし、明日をも今とし又今日を明日と爲し得る大精力なり。愛は嫉まず誇らず驕傲らず、非禮を行はず己の利を求めず、人の悪きを念はず輕々しく怒らず、凡そ事包容み凡そ事信じ、凡そ事忍ぶなり。あゝ愛は永久までも墮ることなし。それ無常は迅速にして人情は移り易きものなれども、人の心もし眞の愛を宿せば、その間世間に常住あり人情に變移なし。

されど又、人情に變移あり世間一切常住なしとて、俄に愁ふるを止めよ。蓋し、今日の敵は明日の友たるべく、又今日の非運は明日の幸運なるべければなり。宇宙の萬象人界の萬事つらく／＼大觀すれば、實に一大カレオスコープに似たり。その變りその移りその常無きもの、是れ即ち美なり。變化なくんば、如何ぞ美あらんや。變化は美の在る所因なり。人よ、感銘して皇天に拜謝せよ。神は無常を以て天地を飾り給へり。しかも又、無常を飾るに常住不變の愛を以てし給へり。あゝ、無常は美なり。されど、愛は更に美なり。英雄の心魂愛に溶け、宇宙の天則また愛の爲めに亂さる。

何ものぞ只單に「ホーム」を樂しと云ふ、ホームの樂しきにはあらず、ホームの愛の樂しき也。何ものぞ、只單に戀人をゆかしと云ふ、戀人のゆかしきにはあらず、之に住める愛のゆかしき也。天地愛あり、この愛に感激するもの〻目には、天地ゆかしくして樂し。天地愛あれども、之に覺らざるものには、寂寥孤獨、秋のさびしきと、冬枯の心細さとを如何にして過さんとはするぞ。

胸に萬斛の涙あり、事に觸れて迸ばしり、愛着の念せきとむべからず。花に泣き、月に泣き、虫に泣き、露に泣く、ましてや、大凡その人の哀れと、其いぢらしさとに對ふに於てをや。天眞流露して、油の如く、蜜の如く、此時、此心の積誠天に溢れ、地に溢れ、天を貫ぬき、地を射通すべし。果して然らば、愛を寄せられたるものは變り、愛を寄せたるものは朽ち果つるとも、愛と愛との結ぶ實は永久ならん。

電光必らずしも短か〻らず、長壽必らずしも長からず。生きて、虚僞形式の交はりを煩はしくし、以て終生の能事と爲すとも何の面白きとぞ。生命は感激にあり、人生は愛にあり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

爲に以て身を棄てゝ遺憾なきが故に無常の身反つて常あり。變化榮枯の跡、美人白骨となり、青春老髮に隣るとも、愛に日月と老少とあらんや。其葉は常に緑なり、其花は常に紅なり、其實は常に香はし。嗚呼、天下の至寶、何處にゆくとして能く之に敵ふものぞ。

夫れ、愛の心には敵者を有せず。たとひ、何等の冷熱ありとも之によりて增減せず。其のいぢらしさは益々加はる。其の哀れさは彌〻加はる。其の愛らしさは益々加はる。惡まんとして惡むヿを得ず、恨まんとして恨むヿを得ず。胸中たゞ人生の無常を念ず、此の念則はち有常に非ずや。

左らば、我、何處にゆきて誰を友とせん。彼を友として之によつて最後の慰安を得ば、彼必らず無常、其の無常の顯現の時果た誰にゆかんや。妻子の顏ばせも遂に消ゆべく、老親の姿も遂に失せつべく、友も反くべく、戀人も變るべし。左らば、我、誰に行て誰を最後の慰さめとせん。他なし、只だ吾心これ也。わが心、また漠たり、吾心の何れの心を友とせん。たゞ則はち愛これ耳。愛あり、人を念ず、愛あり人生を念ず、愛あり天地を念ず、愛あり山川草木國土禽獸を念ず。この心我に存して變らず、故に心外つねに常也、豈に事々しく無常の迅速なるに驚ろかんや。

然りと雖ども、手を握りたる友も、泡の消ゆる如く消えゆき血を分けたる愛兒等も、竹の折るる如く折れゆき、偕老の人は死し、愛者は心がはりし、而して、街頭の車馬は忙がはしく砂塵を蹴立てて走り、人は營々役々として額に汗せするのみ。百萬の大都寂たるに似たり、億兆の人衆默するに似たり。而して此時、眞に心溫たかく、胸、微笑するヿを得るもの、誰ありて然る。たゞ吾心の眞愛、天上の大愛に連結して、毫も孤獨ならざるに由る。

嗚呼、世上、心寒ならざるもの能く幾何人ぞ。心中、友あるもの果して幾何人ぞ。朔風凜烈の下、梅蕾を撫して、胸底微溫あり、笑つて一陽來復の曙光を望むもの、果して幾何人ぞ。嗚呼、同もに泣くものよ、同もに咽せぶものよ、同もに寂寥に堪えざるものよ。其のあぢきなく、つれなしと思ふ宿想を一轉し、須からく先づ一切を愛すべし。三界何れも無常なれども、只だ愛あるものの心には皆な吾有あり。億兆の衆生、何れも我意あれども、只だ愛あるものの心には皆吾友なり。

我友何處に逃れゆかん、ただ愛の里のみ。我何人を友とせん、たゞ吾が心の愛のみ。愛よ、愛よ、疑がふことなく、危ぶむことなく、懼るゝことなき、吾愛よ。われ裸躰となるとも、汝は離れじ。我、全身を燒るるとも、汝は離れじ。我、死すとも、汝は離れじ。吾が生命よ、吾が魂魄よ、吾が永久の限りなき寶よ。(有美生)

「衣食の爲め」の福音

衣食の爲に勞苦するを、こよなう賤しきことの如く言ひそめしは、何れの時よりなりけん、兎も角も人の日々齷齪として一意たゞ衣食を得るに汲々たるを見れば、口やかましく罵りて、これを理想なきもの主義なきものなりなど言ひ囃すこと、是れ近時の惡傾向なり。これを言ふ[illegible]輩[illegible]これを口にする一事によりて自ら理想あり主義ある者なりとして天下に誇り之を聽く人たゞ此の言あるが故に其人を高しとす。衣食の爲に勞苦する人、果してしかく賤むべく、所謂理想の爲め主義

の爲め天下國家の爲めに勞苦すと自ら稱する人、果して尊むべきものなる乎。

夫れ、主義は崇むべきものなるべし。理想は美はしきものなるべし。天下と國家とは威あるものなるべし。されど、共に人の生死に直接なる關渉あるものに非ず。たゞに人のみならず總て生きとし生けるものゝ終始最も念とするところは、生死にして、其他の百事萬端これ抑々末のみ。故に、人たるもの死を避けて生を享けんが爲めには、其全心全力を盡くして毫も悔ゆる色なく、不老不死の靈藥を得んとして、蓬萊を訪はんとするまでに至る。況んや、汗血を絞りて勞苦を厭はざるが如きことをや。

人は天下の一介にして、國家と人類との一員なれば、天下の危急と國家或は人類の存亡とは、其身に關はるところ多し。然れども、此くの如きはこれ間接のみ。されど衣食の關するところは是れ直接なり。衣なくんば凍えざるべからず、食するもの無くんば饑えざるべからず。若しそれ主義の如き理想の如きに至りては、實に人を去ること遠くして、その主義の高まり理想の高まると共に、益々人を離れて天に近づく。理

想亡ぶるも人なほ生き、主義斃るゝも人なほ存し、自由既に死して板垣なほあるに非ずや。然れども、一朝衣食の道絶たるれば、人は忽ちにして斃れざるべからず、瞬時にして死せざるべからず。これ最大事ならずや。是に於てか、人は決然として奮起せざるべからず。所謂一生懸命ならざるべからず。もし、しばしの油斷あらば、忽ちにして衣食する道を失ひ、路頭に彷徨せざるべからず。

衣食ならざる一物の爲めに勞苦するは、一見甚だ高尚麗潔なるが如しと雖ども、假令一旦その辛勞苦役を廢するも、爲に衣食を失ふ恐なく、從て生命に危害を招くが如き心配なきを以て、その辛勞苦役の間に於て、全心全力を之に注がんことの如きは、到底能はざるところたり。その全心全力を注ぎつつある如く見ゆるは、これ唯僅に感興の勃然たる間のみ。一たび其感興の冷却するものあれば、これまでの熱心は何れにか消え失せ、全く其事業を廢絶するに及び、恬として知らざる眞似す。畢竟するにこれ其人が衣食の爲に勞苦せざりし弊なり。此くの如くにして、總て衣食の爲にせざる人の盡瘁刻苦は、その根底甚だ薄弱にして、恰も風に動かさるゝ葦の如く、其事業と職業とに對する執着心薄く、又自ら移氣多きものとなる。

然れども、衣食の爲に勞苦するものは、一たび其職務を離れ其事業を離るれば、直に死せざるべからざるが故に、需めずして其職務と其事業とに忠實となり、これに執着して計畫努力すること、頗る親切綿密たるに至る。されば、衣食の爲に勞苦する人にありては、其取るところの職務と其與るところの事業とは、即ち是れ其人の生命なり。事業なくんば其人に生命なく、職務なくんば其人斃る。

かく、其心血を注ぎ、眞に生命を賭して其職務にあたり其事業を營むが故に、其職務と其事業とは、悉く是れ血悉く是れ汗より成るものにして、それを營みそれに當る人の生命、即ちそのうちに宿り、其事業と其職務とは、まことの生命あるものたるに至るなり。假令へば、衣食の爲に業務を取る人は、眞劍によりて勝負する如きものにして、生死忽ちその試合によりて決す。眞面目ならざらんとするも豈に得んや。あゝ、天上天下眞面目なること、衣食の爲に勞苦するに如くものあらんや。一生懸命の眞意義は、實に衣食の爲に勞苦する人を

觀て、始めて後に知らるべきものなり。

然るに、所謂理想の爲め主義の爲め或は又天下國家と人類と社會との爲に勞苦盡瘁して、衣食を顧みずと自稱する人々の如きは、これ恰も木劍竹刀によりて試合はんとするに似たり。その勝敗は素より榮辱の分るゝところなりと雖ども、生死の分るゝところに非ず。故に、如何に精勤し如何に忠實なりと雖ども、其意氣込みに於て、眞劍に依りて立つ衣食の爲にする人々の意氣込みに一歩を輸せざるべからず。世に、理想とか主義とか人類とか社會とか夢幻の如きものゝ爲に骨折る人人を目して眞面目なりとし、衣食の爲めに勞苦するものを賤んじて眞面目ならざるものとし野卑なるものとする愚さよ。加ふるに、又所謂衣食ならざる一物即ち理想、主義、社會、或は人類の爲に努力すと稱する人々の多くは、一見他の爲にするが如くにして、實は自らの快樂の爲めにするものなり。而して衣食の爲にするは即はち利己の爲にすと言ひ做さるゝに係はらず、其の必然にして天眞に、其の至誠にして虛飾なき、反つて彼の似而非高尙に優るものあり。

吾人密かに世の商業に就て惟えらく、其の獨立にして不羈なる、到底、買文賣辭の人の及ぶべくもあらず。頭を下げて陳謝する幾十百なりとも、こは挨拶のみ、かの主義を屈し、精神を削るが如き、さもしきものにあらず。忠實に勞働して、相當の工錢を得、以て衣食し、以て妻子を養ふ、豈に靑天白日大丈夫の所行にあらずやと。

今や、衣食の爲にすと云ふとを一槪にけなして、而も其以上に超卓するの自由あるにもあらず。衣食そのものゝ如き必用に迫らるゝにもあらで、反つて無用なる見榮、薄弱なる虛飾の爲に束縛せらる。其の心の不自由なる、其の誠の不自然なる、寧ろ此は彼に及ばざるにもかゝはらず、只唯だ儒道西敎の垂訓に附隨して、徒らに高尙を飾らんとす。即はち是れ現代、自信なく、虛榮多きの通弊にあらずや。

吾人は、眞に衣食の爲にするものゝ多からんとを望む。其の之が爲にするその極めて眞面目なるもの多からんとを望む。而して、其の之が爲にするとを公然自白し、堂々所信を斷言する丈夫烈婦の多からんとを望む。寒泉は、微溫湯よりも善く、なまり半弱は、遂に何ものゝ益ともならず。蠻勇の至誠は、ハイカラの虛飾よりも善ならずや。（天雷生）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學

田舍の姑

黑光女史

當世風の御嫁樣は大した孝行者にて御年召されし姑舅の衛生に殊に注意せらるゝことげに思ひの外なり、先づ御老人は歯が惡いからとて西洋料理は凡て若夫婦丈差向ひにて召上られ避暑避寒には御足が弱いとていつも御留守番、東コートは重いからとてアッサリした小形の肩掛にして差上たと云ふ、何から何迄拔目のなき行屆方、持つべきは當世の嫁と、姑君かげで嬉し涙に暮れ玉ふぞかし。さるを文明といふ意地惡き風は、未だ田舍の片隅には通はぬ故か、將又都の方樣のやうに親孝行の少き爲めか、如何に心立やさしく素直なる嫁御も、とかくは姑の御氣に叶ひ難く、誰も〳〵うちの嫁はと、一言の下に排斥し玉ふぞうたてし。されど一躰嫁の所有主は、誰と思ひ誤てるにや、緣談の申込ある時、最初に伺奉るは御本尊の聟君を偖置きて、姑舅の諾否ならずや、娶りて後は如何、聟は只子孫を製造する一つの職工と思ぼし玉ふらしく、彼自らも亦其積りにて女房を給金のいらぬ下女位に思ひて、能い加減に弄び、夫で自分の者か兩親に屬すべき者か一向御存じなき樣子也、試みに見よ姑もし若夫婦打揃ふて野良に出行くを見れば心氣何となくむら〳〵と煮へ返へる如く憤り、何だアノざまは丸で雞のやうなと罵る、嫁少しく夫に對して自分の意見を申立ることあれば、亭主を尻の下に敷くと責め玉ふ、子がなければ嫁の方に惡疾でもあるかの樣に、さりとて年兒でも生めば、何だか餘り嗜みでも惡い樣にさげすみたまふ。そんな些細な事は自分で好きに取計へと叱られても朝夕の汁の實は勿論、香の物に至るまで、何に致しませうかと御意見を伺はねば後必ず禍あり、又袖口、半襟、塵紙の果迄で、一切夫に買つて貰はず即ち姑に懇願し奉らねば、つまりは憎まるゝ原因となるぞかし。

戸棚の隅に何ぞ殘物の腐敗せるものありとも、何とか御指圖のなき内は、たとひ蛆が湧くとも、其儘になし置くべきなり、もし獨斷にて始末すれば必ず食辛抱なりとて舅の君は蔭口をいひ玉はん、捨つれば又勿躰ないことをすると譏り玉ふや、又姑、近所の下司共に物を遣はす時、必ず殊に念を入れて、

之は誰にも内々で私からですよと難有がらせ玉ふ、而してもし嫁一人の了見にて心附したるを發見せらるゝ時は、兩の角を振り、牙を鳴らし玉ふ、之れ自分よりも嫁の方に、より多くの信用の、就かんことの嫉ましきが故や、偶々人の來訪するあれば、常には嫁の手にのみ托して顧みたることのなき勝手許の仕事などを、忙はしそうに立働きて、嫁が呆氣に取らるゝ程、愈々得意顏をなし玉ふ、而して此通りですから終御無沙汰を致して居りますと仰ふせらる、

又孫ありて、母親の膝にもたれて餘念なく戯るゝを見れば、忽ち不愉快の眉をよせて坊やこつちへ御出でと引離し、何でも御祖母さんでなければ夜も日も明けぬやうに仕向けざれば承知し玉はぬなり、

嫁は又野仕事裁縫料理等、凡ての力量姑に立勝らねば御氣に召さねど、さりとて其勝りたる點を無理に押かくして控へざれば却而憂目に遇はん、嫁粗服着て働けば、姑君いはん御前が其樣な身成をすれば世間からは私斗り笑はれますよと、嫁驚いて襦袢の襟を取換へれば、此度は若い者には困つたもの、何時迄も花嫁の心持にて洒落れて斗り居ると、病めば即ち作病と疑はれ、健かなれば人の思ひやりに乏しいと嘆ぎ玉ふ、右に避くれば左より追詰められ、前に進めば後より攫る、實に嫁たるものは當惑せざるを得ざるなり。姑は又此當惑する樣を御覽ぜらるゝが老後の御樂しみなるが如し、如此松の古木にも似たるひねくれやの姑に朝夕ねめつけらるゝ田舍の嫁の心は、果して如何なるものにや、

迚も都人の想像だに及ぶ所にあらざるなり、而して最もおかしきは酷なる姑程他人の嫁に對しては一方ならぬ同情を有するとなり、心からの涙をこぼして、嘸辛からんといふ、是れ必竟自分の邪惡を不思自白するものや、かく生命も短縮するほど姑にいぢめられ、小姑になぶらるゝ嫁の心情は果して如何に成るべきや、始の内こそ涙ハラ／＼氣もおづ／＼して人の顏色にも心を碎けども、一年二年の内には所謂千枚張のづう／＼しくなりて、百萬の小言も何とも感せず、又何時もの鳴かと鼻先きで聞くやうになり人を妙に冷視して、口では何事も逆はねど心の内にては一つも成程と感服なし難く、一種の反抗心を以て充さるゝに至る、或姑の如きは、若夫婦の仲能きをそねみて、夜な／＼彼等の寢室に忍び行き、子を生ま

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

しめざること數年なりき、其内に流石の愚息子もやけ酒をあふり始め、名を要事に托しては外泊なし、私かに情婦と不義の快樂を貪るに至りぬ、されど悲哀と冷酷に馴れたる嫁のハートは、最早や鉛の如く冷かに固くなれり彼女の愛は灰燼となりぬ、彼女の涙涸れ情消えたり、待つ人もなく待るゝこともなくむなしく空閨に冷かなる夢を結んでも猶ほ虚心平氣となれり、云ふ勿れ女の禁物は嫉妬心なりと、嫉妬は愛の反面なればなり、全く絶望したる女の心は、實に枯木の如く、又砂漠にも似たり、オールドミスのすねてしめけのなきは、まだ忍ぶべくも、夫の愛を失ひたる女は、更に物凄く酷烈なり、人の苦痛を見て冷笑する的いぢ惡き者となる也、終に彼の女は精神的に謀殺せられるんぬ、又子を持てるとなき姑己が養子と不潔なる肉慾を了げんため、嫁を邪魔物になし、子迄ある仲を生木の如く烈きて、破鏡の悲みに陷れたる例もあり、或は息子の手前恥ふ色もなく、若々しき嫁を自由にして一家の平和を損ひし舅あり、かくても猶ほ嫁に不孝不從順の罪を負はしむ可きか犧牲の心なしと責むべきか、世事に經驗疎き嫁の勿論多くの缺點はあるべし、時に吾儘の振舞もあるべく、不柔順の行ひも時にはあるべし、されど嫁も亦人の子なり、獸にはあらず 人間を扱ふに人の道を以てする當前のみ、辱けなくも明治の聖代は動物虐待防止會てふ特典を獸にさへ與へらるゝにあらずや、

我はもとより田舍者、都の方樣は知らねど田舍の姑は大概ね安達ヶ原の鬼婆々的惡性者のみ、世には養育院孤兒院なるものありて、鰥寡孤獨を憫むの道立ち苦學生に事務を與へて勉學せしむる方法備はれり、或は堂々たる博士學士等兒童研究の爲めに、筆に口に論ずる所あり、又猫として一種の侮蔑を受る藝者の研究にすら盡瘁せらるゝ義俠者もある由なれど、生きながら地獄の呵嘖にあひ、日夜熱湯を呑んで熱くない樣な風を作らねばならぬ田舍の嫁を、かゝる悲慘の境遇より救はん者果して幾人ありや、見ず識らずの男に心身を捧げて、一生の苦樂を偕にせんとせる女を絶望の谷に衝きおとしたる者は實に罪深いかな、罪は勿論 舅 姑にあれども必竟夫たる男が暗愚盲昧にして、父母の非道に抗して、妻を救ふの意氣地なきに依るのみ、彼は妻を愛するを以て一代の恥辱なるが如くに思ひ誤てり、偶々眞に妻を愛する男も必ず密かに愛し

以て人にはわざと冷淡をよそひて見せるなり、己が父母には、殊更に之を示さゞらんと勉むるが如し、之れ父母の同情を妻に寄せられんとを願へばや、あゝ嫁たるものかくして何時迄でか忍ばんとするか、彼女は誰に向つて此憂を訴へんか、天を仰げど何等の反響あるなく、地に哭すれ共甲斐なし、昔の聖者のたまはく、石叫ぶべしと、されど石すらも彼女の爲めには果して答ふるや否や、意地悪き運命は何時迄か彼女を嘲弄せんとするか、彼女の肉はさいなまれ骨は削づらる、到底精神的に殺されねばやまざるものゝ如し、而して更に疑に堪えぬは、世人が嫁姑の衝突は新舊思想の差違に基因し、且つ嫁に犠牲の心なきに由ると思惟せることや、然り彼等の曰へる如し、されど嫁にのみ献心犠牲の必要ありて何故姑舅と夫には必要なきか、舊思想には理ありて新思想のみは何故非なりや、獨り嫁にのみ柔順なれ服從せよと強て、己れは吾儘戻徳の所爲を許すの道理何處に在りや、而かも田舍の嫁は均しく舊思想の家庭に成長して舊思想の家に嫁ぎしもの也、又犠牲〳〵と好文字を振りまはす先生方よりも、實地に於て確かに犠牲となれるものなり。世人よ都の眞中にばかり人の住むものにあらず、寒村僻地にも尙ほ家庭なるものゝあるを記憶せられよ、都人は幸にして都の生活に當世風の親孝行で亭主大事がりの奥樣と、飄々翩々蝴蝶の如く面白がり玉へど、一度び田舍の家庭なるものを窺ひ見よ、思ひ半ばに過ぐるものあらん、可憐花の如き少女一度むくつけき男に手折らるゝさへいたましきに、赤鬼青鬼寄つてたかつて彼女の生血を啜り、其夫たる者より弊履の如く捨去らる、而して終に嫁自らも難有き姑の訓練によりて、純然たる第二の姑たる資格を備ふるに至る、之を思へば實に慄然として恐れざるを得ざる也、ああ人生れて田舍の嫁たる勿れとは、自ら彼等に接近して親しく事實を目撃したる我が唇より自ら洩るゝ呪ひの言なり。

巖上松

村の歌人

巖上の松を見よ。落々たる巖の上、土の衣も無く、苔の褥もなき所ろに、松は亭然として立つにあらずや。其の礎ともなれる根は。風に曝され、雨に打れて、膚あらゝぎ、線破れたり。其の柱ともなれる幹は、動かされ、曲げられ、折られて、慘苦の跡、四肢五躰に歴然たり。然るに尙ほ能く萬木の立ち

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

がたき上に立て而も靑々たる綠の葉を展らき、四時色を變えず、屹然として天地に睥睨するの慨ある、何故ぞ。

仔細に其の下を見よ。太く荒らゝかなる大根は半ば朽ちたる如き爲躰なれども、之より發する無數の毛細根は、固き硬き巖石を突き通して、十方四方に蔓延し、砂漠に水をひろひ、乾天に雲を召ぶの忍耐もて、其の養なひ無き所より養なひを吸收す。人もし、巖上の松が如何なる荒れ地より其の養なひを取るかに鑑みれば、人間凡そ不平を言ふべき境界とてはあらじとこそ思はんめれ。

松の姿は、たゞ稚ならしく伸びたるを善しとするぞかし。人間の艱苦もなく只だ獨活の大木の如くなりたるも賞するに足らず。松は、其の困苦の度につれて姿を善くす。尤とも雅致あるものは、尤とも苦しみたるものなり。

松の子の初めて巖の上に落ちたる當初を思へよ。イスラエル人の四十年砂漠に迷ひしとも物かは。甘露あるとなし、火の柱あるとなし、預言者あるとなし。天助あるとなし。たゞ能く耐え、只能く忍び、其の有てる僅かの貯蓄を種として、徐徐根を下せしによつて、漸やく基礎の緒を得たり。之より以後の辛酸豈にたゞ事ならんや。

今ま新春に臨みて、松影に對し、長閑なる歌題として、風流たるざれ事せんに、巖上の此の老哲は如何んか觀ずらん。家庭の人よ、同もに五七の調べを合せんとして、先づ其の餘韻の深き所に潛念せよ。

新年の喜び

左　琴　女

御年始とて結搆なる御座敷に、申分なき美女が、薄紫の曙染の禮服きて、はこび與るゝ高蒔繪の御重の內の數々の御馳走を、少々すき腹に遠慮もなく戴いたより尙幾倍も〱も嬉敷感じたるは、二子の着物メリンスの帶、美しからぬ使の女が御粗末ながらと差出したる、成程粗末なる朱塗の重箱に兼ても何奈と心掛りに堪へざりし、某家の娘の、病氣全快祝の赤飯貰ひし時なりけり。

凡深く知る人も淺き人にても、病と聞ばつらき者にて、若し其人老人ならば、麻裏草履に二本杖襦袢三枚着物二枚羽織に被布と、ありたけの衿を重ねし寒牡丹、ツイ枯て仕舞所を、嫁女の世話にて又此通り、けふは此所まで久し振りにも、頭

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

布脱りたる笑しげなる顔に打向ふは、之も喜しさの一つなり。若し亦若き人ならば、偖も不思儀よ彼の厳格なる家庭の内に當時流行のなまぬるき、戀愛風が吹き込て、彼の方ならずばとの不所存を娘の口より云ひ出す如き間はなき筈、去とては何の病か、早四週間も足が立ぬとはと、氣遣ひたるに、山茶花一枝、手紙一通、脛の腫物も此頃癒たれば、歌留多會には是非とも私をと、加へてほしき可憐の眞情、是も喜しさの一つなりかし、之等はほんの譬と、こゝに事實の歡は、朱塗の重箱祝の赤飯、ぬしは何なる身の上なるか。

去年の夏まで住たりし所の、隣の家に、あはれ世上の女を皆この樣なる心術に仕立上たらばと思ふ斗に好ましき娘ありき、三歳の時より今の家に養はれたるが、曾て幼少より父母の言葉に背きたる事なく、淳々唯々として奉仕に力を竭しつつある平常を見れば、餘りに氣慨なき時代娘かとも思はるゝに、四年このかた小學校の教師をなし、十人二十人の男教員に打交り、五六十人の蓮葉も多き生徒をあつかふ事、雪の中なる梅の花、凛然たる氣性の的裡に籠れるは知べし、此人一昨年の秋、兩親の意に適ひたりとて、之も教員なる人を養子

に貰ひたるが、御目出度しとは當座の事、母なる人、貪婪まくことを知らぬと申程では無けれども兎角一方に片よるが女性の失にて、やゝとも爲れば利にのみ趁り、之が爲には、怨恨を人より招くも顧ぬかの風あるに、養子は謂ゆる當世風、算用合ふて物たらぬは、若き男の慣ひぞと大目に視ても濟たらんを、彼でもない斯でもないの小言朝夕絶ゆる事なく、優しき娘は貞と孝との二筋道、恩と情の柵を、解くによしなく思ひに沈めば、養母は我につれなしと腹立、婿は此家面白からずとそわ〳〵するに、衝突の度は愈高まりぬ。

娘は憂き月日の中にも、宿世の縁か、去年の三月より懐姙の身となりけるが、吁恐れても恐るべきは、常識のかけやすき女心に、利財の才の餘りに發達なしたるなりけり、姙娠五月世の常ならば、帶の祝ひよ御守りよと家内一同悦ぶべきに、こゝには利に迷ひたる母親が、斯く家の相續者の出來たる上は、氣質も合ぬに雜費の多き婿を置くも無益の事との考へより、誰もまつらぬ佛性の父には相談もせず、子でも出來ますれば自然に氣風も變りませうなればと、娘の頼も一切かまはず、誰が聞ても穩ならぬ離別をなしぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人の性質は住所によりても變るは慣ひ、棟わり長家の親等は、娘を賣女に仕立上んと丹精こらして、常磐津、さわり、新内と、習せ居る間に、いつの程やら親はすて、或夜密に誰やらと、白手拭の吹流し、此出來事は、未だ手もとゝきかぬる頃より、稽古なしたる三味線の、高い山から谷底見たるが抑なれど、唄を實地に演習なすとは親等夢にも知らざりしなり、手段はかはれど意味の似たるは、隣の養母の心ならんか、利益に深き考へよりして、裁縫、茶の湯、琴、生花、人に教授の出來得る迄娘に習得させたるは、其品性を高めんとには非りしが腦漿やわらかき時の事とて、能き習慣の性に染りしか今は母子心術の高下甚敷、處世に不利なる倫理を踏む女教師にはなぜしたかと、生別の夫をしたうてか此頃とんと浮き立ぬ娘を見ての後悔は、餘りに罪深き心なりかし。」

娘は其頃より病氣となりぬ。前後の事情を知れる我は實に見る目も傷しく思はるゝに、夜半人しづまりし折々に、壁をもりくる嘆息の聲、歔欷の聲、アナヤと愕き、傷しと泣き實にこゝ憂き世の最中かと味氣なく感じをりしが、其後娘は出產し男子生れたれど、長く母體の苦み居たる故なりしか、二週間の後亡なりぬ、是をしも憂きが中なる樂にと一時は、瘦たる頰に微ながらも希望の色も見えたるに、其子なくなりて再び世は常闇の心地やしけん娘は人事もしらぬ大患になりたるが、物窮れば通ずるとは實にて、其頃より動機は何か恐くは言ず語らず此世を去り無心の子の笑顏なりしか、然らずば、病熱の囈に、離別の夫を呼たりし哀れの聲かの二の中なりしならんが、前に生木をさきたる如き、鬼々しき養母の胸に佛心宿りて、打て變つて娘をいたはり日夜慰め懇に看護し初たれば、恩に感ずる事深き娘の心を照應し、流石に重かりし病もやゝ快方になりたる頃、我は仔細あつて轉居なしたれど、同情の念猶去がたかりければ、折々尋行て樣子は見たれど、養母の手前多は語ず成べく氣分の引立書籍を持行き、密において歸が例なりしが、新年は一月二日、朱塗の重箱全快祝ひ、是ぞ今年の喜び初なりける。

○戀歌　　善魔の子

一樹の陰　一河の流
あゝ　多少の緣

卿の腕　我が腕
あゝ　宿世の緣
汲まん卿の唇に　情の若水
宿らん卿の胸に　絲竹の調聽きつゝ

勅題料理

生間正起

巖上松　手輕き吸物

鴨の身を微塵に叩き醬油にて調味したる煮汁を少し滴し加へ芹の細斷を混和して之を巖形につくねたるを巖石鴨といふこれに薄く片きたる松露を取合せ調味したる煮汁にて下煮をなして吸物碗へ身と松露を抄ひ入れ別鍋にて調味し煮たる煮汁をはるべし

松茸があれば松露を用ゐず松茸を用ゐるべし併し松露は罐詰屋にあるを以て之を用ゐれば頗る便なり

仝上　仝煮肴

鯛の身又は烏賊にても四角に切り縱横に刀痕を入れて炙るも煮るも切目のはぜたるを松かさ鯛、松かさ烏賊といふこれを甘煮の岩茸に組合せ小鉢類に用ゐるべし

岩茸は莖を去り能く洗ひ十分に湯煮して酒しほに湯を和して煮えたる處へ岩茸を投じ醬油を少し注ぎ砂糖を投じて甘く煮詰めるべし

右の料理法を見る人はアーツウカ位にて平々凡々の料理法の如く思ふ人もあらうが之を余が門人に口授する時には一法にても相應に挨拶を持て來る此の料理法を茲に掲げたのは女學雜誌諸君と愛讀諸君の萬歲を祝せんが爲である萬歲

次の話は一寸分り難い話であるゆへ極古き處の事は姑く置き貞享四年頃より天明頃迄毎年正月三ヶ日の内に　主上へ御据え申御齒固の次第を御話し致そうがこれも朝廷の古き御儀式を知らぬ方には御分り難いであらうが分らねば余が初夢の寢言話と思つて見ても損は往かぬ話である

御齒固

折敷六枚　外のり長さ九寸五分幅七寸五分深さ九分尤金尺の定めなりこれに雲母をながし緣背にて老松又は鶴を畫く

高坏六本　これは京都紀伊郡深草村にて燒く土器なり凡寸法は金尺にて上のわたり三寸五分下のわたり四寸高サ五寸程なりこれにも雲母を引き松鶴を繪き此の高坏の上へ右の折敷を据えるなり

打敷一帖　白き平絹金尺にて三尺二幅也これを高坏六本の下に敷くものなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第一　御酒盃　土器

第二　くほつき四口 四口とも大土器也　瓜の種 茄子種　御はし二膳　白散 屠蘇

第三　御鏡餅　餅の上へ押鮎二ツ　細蘿蔔一株　三成橘一枝 此の三色を一所に白薄様にて包み中央を結ふ杠一枝敷く

第四　高盛　雉 鯛　四坏とも盛とめに四角に切りし身を置く身は生、生身なき時は鹽漬を用ゐるなり

第五　高盛　押鮎 煮鹽鮎　押鮎二坏は鮎の頭を一ツ、横に上置にす煮鹽鮎には鮎の頭を二ツ置くなり

第六　高盛　糟漬瓜 細大根三　糟漬茄子 蕪三ツ　俗にほがなと、いふ 大根 蕪とも引合せ又は薄様にて結、結とめにちゞめをする

右に用ゐる土器深草焼也 径三寸 御酒盃に至る迄ごめんにて塗りきらをかくる　御酒盃を除くの外は皆薄様にて敷紙あり

右折敷の四方に心葉の松あり　以上廿四本也これないかものゝ松ともいふ

四方にあげ巻あり　白きねりくりの糸にて結、長サハ折敷の角より打敷の上まがる程になすなり

御前に据様はかくのことし

　　第四　第二

　　第五　第一

　　第六　第三

院御所、坊御所、親王御所の御歯固は右と少しかわる也

隨感

○犬ころし

愛犬「黒」不憫にも突殺されたる夜、「白」と云へる他の一つも大傷を負ひたり。此の犬の我に投ぜし因縁の不思議なると其後の思ひ遣りの尋常ならざりしより、一方ならず治療に掛念せしが、うれしくも日ならず全快し、今は復た昔に變はらぬ聲を揚ぐるに至れり、回顧するに大凡そ二た年の前なりけり、死せし人の七週回忌日と云ふ日に、泥に塗れたる白き大犬、蹌浪として吾家のほとりにさまよへり。其躰、宛がら醉えるが如く、走らんとも、逃げんともせざりけり。奇しきと思ひて、偶と彼方を見れば、彼の醜惡無慈悲なる犬ころし太き棒を後ろに隠くし、徐々近づきて一撃せんと爲す。察するに、之に薬餅を投じて醉はせし乎、もしくは一種の怪電氣之を射て、五躰の竦める爲め乎、「白」は只だ其邊りをうろつくのみ。アナヤ一撃の將に下らんとする折なれば、余は遙

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

かに喝して、犬ころしを叱かり、「白」を追ふて逃がさんとするに、彼は尚ほ遠く逃げ得ず、少こしく走りて亦た休む、其狀死神に魅せられし人のわざ〳〵死に近づくに似たり。余は反つて狂する迄になりて、やう〳〵犬ころしを追ひ遣り、之より「白」を家犬の中に加へたるが、其の緣しの奇しきより、一種の情懷相通じ、彼の我を見るも亦た特更なりき。「黑」は幼な子の如く我にざれつき、我亦た幼な子の如く愛撫せしが「白」は、其の躰の大きやかなると、其齒ひの長けたるとに加へて、只何となく應揚に我に寄傍ふ癖あるより、彼は亦た別種の可憐を催ふさせけり。其中、彼病みて食はざると數日に及びし時には、我は淺からず看護したり。數たゝび飲ませたる牛乳は大いに効を奏し、彼が苦しき中に子供の如く泣きし聲も次第に減り、乾きたる其鼻も口も、漸次に潤ほひ來り遂に全快したる時の喜こびは、今尚ほ忘ずることなし。死せし人の由緒復のこり、其の紀念の生還りし心地せしこそ、奇しけれ。彼は斯して近日に至り、近日大負傷をして復た本復せり。彼の幸運を思ふにつれて思ひ出るは、犬ころしの事なり、嗚呼、犬ころし。其他に何かの職業はなきもの乎。かの忠實者を擊ち殺し、此の可憐者を叩き殺し、其の悲鳴を聞き流し、而して食ふ可らざる肉と、少さかの用たる革とを得て、此の無慘なる家業を事とせり。古人曰く、矢人豈に函人よりも仁ならんやと。左れど、犬ころしを爲て、此の愛すべきものを失なひ、其料を以て己が妻子を養なはんとす。妻子愛すべくして、犬、愛すべからざる乎。其の忠は顧みるに至らざる乎、其の信は賞するに足らざ乎、嗚呼、犬ころし、如何なれば、斯る無慈悲の家業に勉强するや。

○團洲死後

團洲死後、幾何日數ぞ、去る比、百日祭すと聞き及びて愕然たりき、吾等が感じにては、既に一二年も過たる如くに想ひつゝありしなり。實にや、惜まるゝと多き人は皆な斯の如けん。此人あらましかばと、事々に念ひ出さるゝとの澤なれば人の感懷に於ては年月を經るとの自づと多かるべし。空然として暮す月日と、多事に過す月日とは、其數同じくとも、其感じに莫大の相違あり。人間長壽の秘訣、他なし。多感多情にあくがれて、一日を百年の思ひするにありける。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

藝術の至妙

例えば團洲子とせんに、其の姿勢、其聲音、余が耳目に糊着し、忘れんとして忘るべからず。恐らく終生かくあるべし。而も、他の俳優が演ずるを見れば、一々に比較して其都度、渠を想起せずんばあらず。則はち、久しく彼を忘れざるのみならず、事々に彼を追慕す。嗚呼、人生藝術の德、こゝに至りて極まれりと云ふべし。人間、志を立てゝ一心不亂に習得す些さか其の酬ゐある哉。

○常陸山

十尺を丈とす。一丈の男子、是れ丈夫。其の大丈夫は方今只だ角力社會に於て見るべく、常陸山に於て筋肉以外の快男子を見る。豪氣堂々渾身より溢れ、不屈不敵の英魂を其顔面に呈はす。就中、劍士自得の氣合を遺憾なく發揮して、巖然打衝、小鷗の飛去り飛來るに睨する爲躰、爽快殆んど言ふべからず。余、近日其の稽古場に觀て、つく〲其の特色を察す。彼が今日擧然として名を爲す所以、そも〲淵源あり。到底

百姓町人の豚の子が只だ肥大せるの故をもて企及すべきにあらざるべし。

○相撲

相撲は只だ勝負を好む人の爭氣をのみ滿足せしむべからず、更に偉大の天職あるべし。英氣、豪氣、俠氣の眞勇は、人の戀思禁ぜざる所、其の姿を實見するもの、何處に求めん。ことに、沒利害、沒邪念の稚氣を合せて、大人、赤兒の如くなる偉相を呈し、屈曲多く、虛僞多く、細策多く、怯惰多き浮薄輕漂の人情を警動し、之をして純朴淡快の古道に復歸せしむるもの、豈に相撲社會の理想ならずや。只だ、泥くさき土の子が、筋肉を膨ませて英姿に似せ、酒を冠ぶつて怪氣を吐くのみにては、一向に高びたる所なし。近くは、先代梅ケ谷や、相撲道に得たる所ありしが、餘りに修養に凝りて爛熳たる天眞を失なえり。更に其の糟粕を多くするもの、今の梅ケ谷ならずや。たとひ多力、多勝ありとも、尙ほ人氣を爽ならしむると能はざる、此の故なり。惟ふに、劇界に多恨の詩人の斷然身を投ずると多からんを希望すると同もに、相撲

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

道に、英雄の躍然一身を與ふると多からんを切願す。昔しは木のはし竹の屑の樣に思はれたる僧籍に身を隱す靈骨多く出でて、此の界光明を放てり。凡そ將來新たに開拓すべき面白き新領土は、既に常陸山、團洲子などによりて先鞭を着けられたりとは思はずや。

○藤間勘右衞門

花柳壽輔は終に見ざりき。去年來、數度、藤間勘右衞門を觀て、驚ろくと大方ならず。曲線の美、靜動の和、こゝに及んで妙を悉くすと言はん。之を寶生九郎に比ぶれば、更に艶なれども、其艶、質を成して浮ならず、都雅わざとならず、一入に面白し。之を其の徒弟たりし團十郎に比ぶれば、更に奥遂く、更に巧妙なり。而して、翩々たる姿勢、寸分の間隙なく、よしんば劍を以て向はんものあらんに、蝶の擊ちがたきか、美姬の斬りがたきか、かげろふの拂ひがたきか、獅子の刺しがたきかの如く、蓋し大方は目にも止まらぬなるべし。其齡ひ七十、其の腰若草の如く、其頭白髮、其姿佳人の如し。感歎措かざるもの、近時如此きは尠し。

雜録

舍監の四ケ月（其五）（完）

有美

○珍らしいこと可笑いことの有勝なのが、さてこの舍監と申す職務でテ……生徒の方でも、又舍監を誤魔化したり、舍監を苦しめたりするには、隨分有ゆる方法を講ずるものでサア……まづ粉骨碎身といふかゝりなんですが……それは〳〵腹の皮の縒れるやうなことがありますよ。ドウせ小供の爲る行爲なんですから、皆な何事も頭隱くして尻隱くさずと御出でなさるんでテ。

○一体、舍監と云ふ人種は……何よりも火事のことを心配するものですから、消燈喇叭が鳴ツてから、なほランプを點火てるのを、酢つぱくなるまで口やかましく小言をいふて、嚴重に取締るものなんですが、……それを何んとか喧ましく言はさんやうにしようといふのが、又生徒方の工夫でテ……仲々面白いことが出來しますサ。

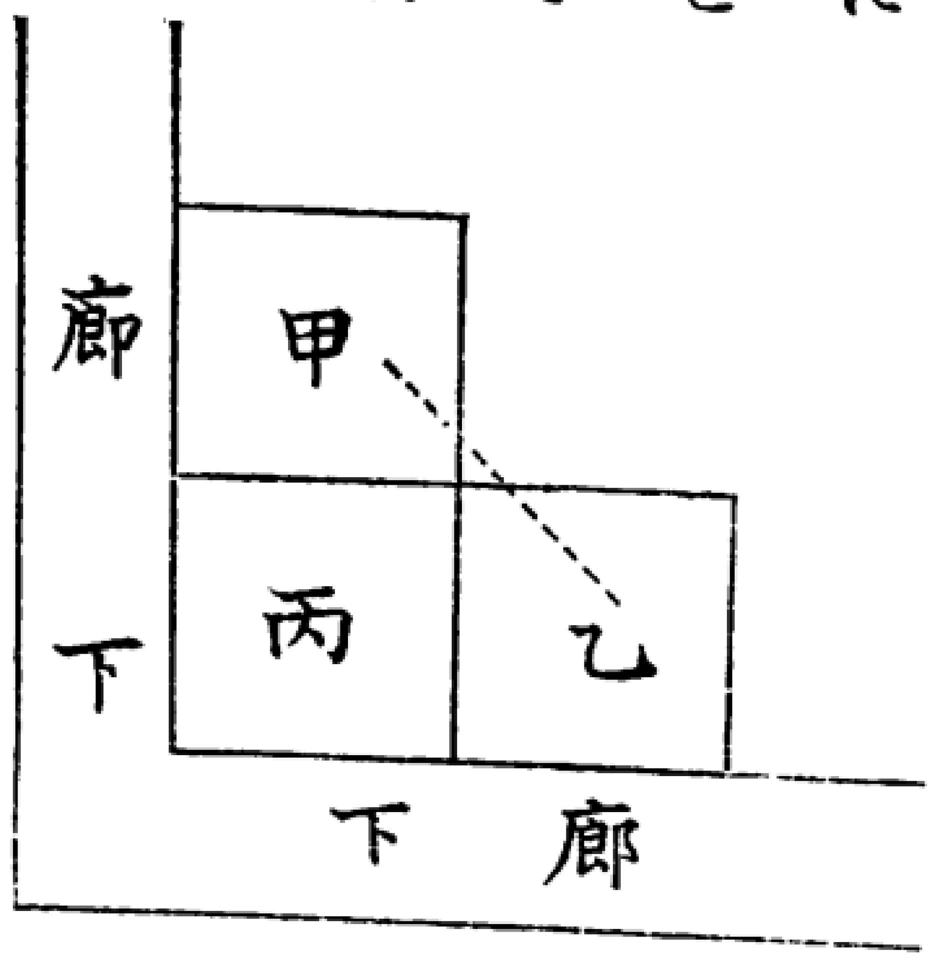
○さて、机の下を一方だけ殘して三方悉く黑い布の幕で取

捲き、全く包んでしまふのです。これで葬儀用の臺をつくる積でもなんでもなく……その包まずにあけてある一方のところからラムプを机の下に挿れます。そればかりなら、まだしもなんですが、頭を一緒につッこむんでサア。これが本當の頭隱くして尻隱くさずと申すものなんでせうが、それで全くラムプの光が舍監の眼に留まらんと思ふてるから可笑いので……豈に計らんや、黒い布のかげにアリ〳〵と幽靈ならぬラムプの正躰が見られますサ。しかし、舍監が巡視に來て、長く我が室の前に佇立してると見るや、追々とラムプの火を細くして、遂に消やします。

○また、手さきの利く或る生徒になると、厚い畵洋紙か何かで小さな箱を拵え、それを皆な墨で黒く塗つて、一方に戸をつけるのです。それで、その中には又同じく小さな豆ラムプを入れて置いて、床の中にもぐりこんでながら、半開の戸の隙間から來る光で、愚にもつかぬ小説でも讀むんでサ。この方は黒幕よりは光が外に漏れないんですが、しかし、矢張り見えますよ。舍監に認られたナと思ふと、頬をヒヨットコの面のやうに膨らして、フッと吹き消します。無類のポンチ書で……

○或る時、例の如く巡つて行くと、何か知らんがヂヤラン〳〵と音がする。ハテナと室の中に足踏み入れて見ると、窓の敷居の上から麻の操糸が下つてゝ、その糸の端にはインキの空瓶を結び、孔の穿た一厘錢二厘錢が七つ八つ通してある。それが上下して、ヂヤラン〳〵の奇音を發するので……しかし、何の爲にするか一向にわからぬ。が……其手品の種をわかッて見ると、實に可笑いので……實に頗る非常におかしいので……アハハ……ハ。

○まアこうなんですよ。即ち圖にある如き位置の甲の室と乙の室とが互に連絡を通じて…子…その甲乙兩室の間に點線の如く紙鳶の糸を引ッ張ッて置く……それが前申した糸なので……。して、舍監が巡視に出かけて甲室の前に參りますと、その少し通り過ぐるのを見て手早く豫て仕掛の糸を引く……すると、乙室では其糸の端に附いてるインキの空瓶と寛永通寳とがヂヤラン



〳〵と鳴る。それ來たといふので、室員一同は俄に机に向つて本を開げる。丙室の前を通過して乙室のところに行つてみると、實に靜肅この上なしといふわけなんでサア。同樣に、舍監が乙室の前に行くと、甲室に相圖をする。甲室ではチャンと準備を整へて待つてるといふ仕末で子……それは〳〵實におかしいんです。

○或る夜のこと九時頃に散步から歸つて舍監室に這入ると、部下の軍曹あがりの舍監先生と、一人の室長とが盛に赤くなつて議論を戰はして居る。何ごとかと耳を傾けてみると、軍曹舍監が或る舍生の不行跡を責めんとし、一言も無くムヤミになぐつたといふので、抗論を申込んで來たのでした。

○軍曹舍監口を滑べらして曰く『……軍隊なぞでは規律を重んずるから、仲々こんなものでは無い。ドシ〳〵やる………』○室長曰く『それは野蠻といふものです。そういふ野蠻な教育法は軍隊と雖ども止めなければならぬ。近頃國民一般に兵隊に行くのを厭がるといふのは、そういふ野蠻な教育を敢てするからです……』○軍曹舍監餘程あぶなくなツて來た。救はずんばあるべからずと思ふたのは、傍なる勳七等靑色桐葉章の曹長舍監である。曰く

○『オイ〳〵、なにがし……言葉が過ぎるぞ。軍隊を野蠻とは少し考の足りない言ではないか。一躰軍隊はドナタが統御して御坐ると心得てる？ウーン、……上御一人では無いか……』○僕たるもの是に至りて殆んど噴き出さんとしたが、……マテしばし……こゝが僞善のしどころだワイと、至りて眞面目くさつた顏を作り、極めて壯嚴な調子で『なにがし君……議論は大抵にして……止めて寢たまへ。モウ大分遲いから、朝の早いのに困るよ。兎角あまり長く饒舌つてると、話のうちにボロが出るものだからナ』とトヾメをさしてやりました。軍曹舍監は辱くも金鵄勳章功七級の勇士で、その晚は少し御酒召してたのです。

○それで、從來の舍監のうちには、生徒に稍々惡意を加味した胴上げをやられるので、天長節の晚なぞは雪隱に隱れたの、室の窓から飛び逃げたのといふ珍談もあるのです。

（完）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

英領印度帝國（上）

横井時雄演

世界の强國と申しまするならば何人も先づ指を英吉利と露西亞に屈するのでありります、英吉利の版圖は太陽の沒する間がないと云ふ程全世界に擴まつて居りまして無慮一千百四十萬方哩と云ふ程の尨大なる者であります、其人口は幾らあるかと申しますならば四億五千萬人程あります、露西亞は其面積八百四十五萬方哩其人口一億三千萬人と云ふ程の大國であります、其他の支那亞米利加合衆國佛蘭西獨逸等に至つては或點に於ては或は此二ヶ國に比敵し若くはそれを淩駕するものもあるかも知れませぬが先づ强大と云ふ二點に付て論ずれば到底此二ヶ國には及ばないのであります、而して此二ヶ國の版圖と其人口を比較して見れば英吉利の方が御案内の通り遙かに露西亞に勝つて居るのであります、然るに其英吉利が露西亞に勝つて居る所以を尋ねて見れば如何なる理由に依て勝つて居るかと云ふならば取も直さず英吉利は彼の印度と云ふ大國を支配して居る、印度と云ふものが英吉利の帝國の一部分を爲して居るが故に露西亞よりもえらいのであります、若し試に印度と云ふ國其面積百八十萬方哩と云ふものと其人口二億九千萬人と云ふものを差引いて見まするならば英吉利と云ふ國は忽ち露西亞と余り甲乙のない國となるのであります、左れば印度が英吉利帝國の組織の中に在つて如何なる重要なる部分を占めて居るかと云ふことを推測して見まするに統計年鑑の如き英吉利で出來る書物を見るに先づ英吉利の帝國を三分して第一に本國即ち合衆王國と稱する所の蘇格蘭、英克蘭、愛耳蘭の本國で其次に印度帝國と云ふものを置いて居る、其次に海外に於ける領土と云ふ名稱の下で加奈陀とか濠洲とか亞弗利加とか云ふやうな殖民地が出て居ります、それを見ても如何に英吉利が印度を重んじて居るかと云ふことが想像するに足るのであります、又我々日本人に取りましては近頃印度と云ふ國は非常なる大切なる關係を以て來たのであります、素より以前には印度より宗教と云ふものと哲學と云ふものを我國に貰つたのでありまして印度は彼の支那に次ぐ所の恩人の國であります、併しそれ等の古い關係は先づ別のことゝ致しまして近い關係に付て申して見れば印度と日本の貿易と云ふものが今より十年程以前には僅か六百七十萬圓に過ぎなかつたのであります、然るにそれから十年程經つて後進歩したる其結果がどれ程になつて居るかと云ふと三千五百萬圓と云ふ大した高になつて居ります、而して我國に於て近頃工業が大に發達して殆ど日本の第一の工業とならんとして居る所の彼の紡績業の如き其用ふる所の綿と云ふものは三分の一は印度に之を仰いで居るのであります、それから藍の如き米の如き又馬及び羊毛の如き印度から日本に輸入する品が澤山あります、今年の奥州の饑饉に就ても印度より恐くは百萬に近い米を我國に輸入したであらうと思ひます、又日本から向ふへ輸出する品に付ては羽二重が百六十萬圓位の高は向ふに這入つて居る、それから燐寸が大變なもので是れも百二十萬圓位其外石炭龍腦陶器蝙蝠傘又は手布煙草漆器など澤山我國より印度に輸出せらるゝのでありま す、殊に著しいのは彼の羽二重と燐寸であります、今外國に出る内で最も盛んに輸出するのが亞米利加の合衆國で四百萬圓許り這つて居る、其次は佛蘭西が三六十萬圓、其次が英吉利で百六十萬圓、其次が印度で矢張百六十萬圓、英吉利と少しも違はない程印度に輸出して居るのであります、私は印度に參りまして最も意外に感じた所の一つは緬甸のラングンのバザールと云ふ市場に參つて見ましたが此處は米は澤山出來て人口は少ないのでありますから非常に富んで居る、其バザールで賣つて居る絹と云ふ絹は悉く日本から往つた所の羽二重であります、それで其輸入の高を見まするに今より七八年以前は英吉利の絹が百分の九十五位は往つて居つて日本の絹が百分の五位外這入らなかつたのがそれが今日では比例が反對になつて日本の方が九十五も來て英吉利の方が五位しか這入て居らないと云ふことを英吉利人でありながら其樣なことを言つて居りました、それから燐寸に至ては是は殆ど印度で使ふ所の燐寸の過半は我日本から輸出した所のものでありま す、此外に英吉利の燐寸獨逸の燐寸白耳義の燐寸も這入つて居りますが着々として我日本の燐寸が歐羅巴の燐寸を驅逐して其販路を擴張して居るのでありますそれからもう一つ大に有望なのは羽二重以外の絹であつてもう少し地が厚くつて長いのを印度中到る所の土人が用ゐて居る、さう云ふ風な譯で日本からもう少し送出すことにしたならば羽二重位の金高のものは確かに出來るであらうと思はれるのであります、さう云ふ風なことは大に研究を要する問題であらうと思ひます、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

それで印度と云ふ國は昔の唐天竺と云つて居つた時のやうに矢張今日もそれを天竺らしく考へて居つては段々に致つて其は不都合なことでありまして今の孟買とカルカッタの方と濠方とも航路が開らけて居つて三四週間にして印度に達することが出來る時でありますから旁々以て印度のことを研究してさうして貿易上其他のことに於ても印度人と日本人との間の交通をもう少し親密にする必要があらうと私は深く感じて參つたのであります、今日は少し緩くりお話を申上げる積りであります、

印度の地理は諸君は御承知でありませうけれども或はお忘れになつたことを思出す爲めに少し許りお話を致さうと思ひます、併し中には何處に孟買がある、何處にカルカッタがあるのやら知らない人もありますからお話致しますが此處にある所の赤い部分が印度であります、之を印度帝國と稱する所以は所謂印度と云ふものは其中の一小部分であつてヒンドスと云ふ名前は小さなるガンヂス河の邊を指して云ふて居つた者であります、其頃ではヒンドスと云ふことを印度と云つて居りましたが今日ではベルチスタンの方も印度帝國の中に這入つて居ります、印度帝國と稱するのは所謂固有の印度よりも余程廣いのでありまして南から北迄一直線を引いて見ますると千九百哩程あります、それから東から西の端迄は千四百哩程あります、其面積が百八十万方哩程あります、此印度の國境で注意すべきはヒマラヤの山であります、此山は長さが丁度二千哩程さうして其幅が百哩乃至三百哩と場所に依て違がつて居ります、此ヒマラヤの山の中にはマウントエヴエレストと云ふ世界第一の峯があつて二万六千尺もある高い峯であります、さうして山が北に往くに從つて段々高くなつて其高くなつた所に西藏の高原があります、是は世界で一番高い平原でありまして一万五千尺あります、富士山よりも高いのであります、此ヒマラヤの山脈の間にネパールとかブータンとか云ふやうな半獨立國がある、さうして北西の方にはスライマンの山脈があつて此山脈が印度の西の方の天然の國境であります、東の方の國境は緬甸と支那との間に山脈が非常に澤山あつて縱横に東南に向つて走つて居る、さうして茲にもう一つインドヤと云ふ山脈があります、丁度三角なりの形で此インドヤの所から土地が高くなつて南の方にはアッカン高原がある、此アッカンと云ふことは南部と云ふ意味であります、此インデヤと云ふ山が境をして居る、南の方は三角なりの地形になつて居りますが、西東の方も山脈が續いて居る、さうして東の方は海岸が斜めに幾分か傾いて居りますから西の方よりも東の方に重もに河が流れて居ります、此處にマドラスがあります(地圖を示し說明す)此處に孟買があります、此處にカルカッタがあります、此河はガンヂス河でヒマラヤ山の南の方から流れて居つて此東の方から流れて居るブラマプートラ河と合して居ります、此處にある一番西の方の河をインダス河と云ふので此インダスと云ふ所から印度と云ふ名が起つて來たのであります、此處はアフガニスタンでありますが斯う云ふ風に東は山許りでありますから昔から東の方からは殆ど人が這入つて來ない、這入つて來るのは西の方からであります、所で英吉利が航海の術が開らけまして西の山を越へずに喜望峯を廻つたりスエズの運河を廻つたりして海の方から這入り込んで來て初めは孟買やマドラスに根據して居りましたが遂に斯樣な大帝國を取つたのであります、それで或人は支那では到底大陸を取ることは出來ないと云ふことを言ひますが併し印度は考べき問題であらうと思ふ、詰り英吉利が印度を取ることの出來たのは英吉利と衝突すべき大國が無かつたからで支那人があの大陸を取ることの出來なかつたのは他に邪魔する國があつたから出來ないと云ふ譯に歸着するであらうと私は愚考致すのであります、そこで近頃になつて英吉利の邪魔となるべき大國が出て來た、それは何處であるかと云へば露西亞帝國である、即ち八百何十萬哩もある露西亞帝國である、是が若し印度を取つたならば英吉利のやうな第一の強國になるのであるが英吉利が印度を持つて居るから露西亞よりもえらいのであります、露西亞が印度を取れば天秤は其方が重くなるのであります、露西亞はアフガニスタンのヘラットと云ふ都から六十哩の處迄鐵道を敷いて居ります、英吉利の方ではカブルと云ふ都から六十哩程近い所迄鐵道を敷いて居ります、此アフガニスタンは英吉利と露西亞に取つては頗る重要な處で若し露西亞が英吉利と衝突した場合にはアフガニスタンを自分の味方に入れなければ不利益である、英吉利に於ても其通りで孰らかでアフガニスタンを自分の味方に引入れなければならない、それをアフガニスタンが知つて居るから孰らの味方にもならない、それで英吉利の方で此處に駐在官を置かうと思つても中々置かせない、仕方がないから女醫者が澤山往つて居ります

が強いて駐在官を置かうと云ふことになると直ちに私は露西亞の方に附きますと言はれるから英吉利では駐在官を置くことが出來ないのであります、

アフガニスタンの都はカブールでありましてカンダハルは印度波斯の商路の要點でありまして波斯の者は印度に物を持つて往き印度の者は波斯に物を持つて往くのであります、私は此邊の樣子を見たいと思ひまして鐵道でカンダハルに近い所迄往きました、北の方はカブールに近い有名な山路であります、所謂一夫路に當れば万卒も通ることの出來ないといふやうな險阻な山であります、併し今日では大概路も開らけて往復が出來るやうになりましたが流石に今のカブールに近い所は容易に通れませぬ、其邊は丁度臺灣の生蕃のやうな人種が澤山居つて强盜でもしなければ飯が食へないものですから皆な强盜をする、そこで英吉利政府ではお前方は泥棒をするのは廢めにして呉れ其代り金は呉れるからと云つて幾許づゝか金を呉れて置きますがそれても全く廢めない相替らず人を殺して金を取る、そこで仕方がないから英吉利政府でどうかカイバルハーフと云ふ所から十哩の間は一週間に二回――火曜日と金曜日だけは人を殺さないで呉れろ、其外の日はお前方の勝手にするが宜い、若し此日に人を殺すならばお前方の頭を責任者として罰するから此二日だけは責任を負つて呉れろと頼んで火曜日と金曜日だけ人の通行を許してある、其外の日は通行を許さない、私は丁度其日でなくつて外の日に往つたのであります、一日しかペシヤワルに居りませんから是非往つて見たいと云ふとて往きました、其時に特別に官から免狀を與へられて是非往きたければ郵便脚夫が往くからそれと一緒に行けと云ふことで外に兵隊も附けて呉れましたが併し横井君の安全に就ては責任は持たないと云ふことでありますが格別なことはあるまいと思つて參りました所がマア殺されずに濟みましたが何しろ非常の禿山でありまして山の間などから不意に色の黑い奴が馬に乘つて顯れたりする、斯う云ふ奴は夜でもあれば必ず人を殺して金を取るに違ひないのであります、何しろペシヤワルの市街は三万許りの人口でありますが英吉利の北の方の鐵道の終局點であります、此邊の土人はマホメット教を奉じて居りまして若し英吉利人を殺すならば極樂で十人の妾が持てると云ふ迷信がありますので矢鱈に人を殺す、私などは色が黑くつて余り土人と變りませぬから殺されることもなかつたてずが夜は恐くつて出なかつた、此處で私が滊罐車の先乘をしたことがある、先程も是非話して呉れろと催促を受けましたが二度話すのも苦しいから皆さんの前で話すから一緒に聞いて下さいと云つて置いたのでありますが其お話を一寸致して置きます、

それは此處に有名な八千尺許りの高い山があります、其山の八合目の所に隧道が出來て居りまして其處を下から上つて往くのであります、此處がアフガニスタンと英吉利との領地の境目でありまして私が此處を往く時は一昨年十二月の初めでありましたが滊車の車長がやつて來てお前は日本人か、私は日本人だ、見物に來たのか、見物に來たのだ、それならば私が見物の出來るやうにしてやらう、印度の滊車は熱い所でありますから鎧窓のやうなものが下つて居りまして戶外を見るには屈まなければ見えない、そこで親切に言ふて呉れたのでありませうが或友人はそれは君の膽力を試したのだと云ふが孰らにしても宜いが好い處に置いてやらうと云ふのですから有難いと云つた、次の停車場から載せてやらうと云ふことで次の停車場に着いたからプラットホームに出て待つて居るとサア來いと云ふから尾いて往つた、さうすると御承知の通り滊罐車の先にランプが二個附いて居る、其後方が釜でプツ／＼云つて居る、其ランプの間に此机位の平たい所がある、此處へ毛布を敷いて此上へ坐れと云ふことです、(笑聲起る) それから前の方には御承知の妙な大きな圓い物が出て居る、衝突した時緩和するものであります、此圓い物の上に兩足を載せて居ろと云ふのでありますが私は足が短くつて屆きもしないし餘り面白いことでもありませぬからさうせぬでも宜い私は胡坐をかいて居るからと云つて胡坐をかいて居りました、私も嫌やだとは思つたが周圍には大勢の者が見物して居りますから日本人が斯う云ふ所で卑怯未練を示しては往かぬと思つて餘程怖かつたけれども怖くないやうな顏付をして居つた(拍手)けれども唯だ胡坐かいて居るばかりでは危險ですから幸ひ傍らに眞鍮の欄干がありましたから是に緊つかり捉つて居つた、所があちらの鐵道は廣軌鐵道ですからランプとランプの間が廣くつて兩方の手で欄干を掴んで居る譯には參りませぬから斯んな鹽梅に片方の欄干に捉つて居つた、出始りは滊車の進行が遲いから何でもないやうに思ひましたが段々早くなつて來た、さうすると風が私の帽子を攫つて往つた、帽子を攫つて往かれた時は首を攫はれたやうな氣がした(笑聲起る)次の停車場に着

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いた時小さなキャップがあつたからそれを冠つてそれから山を昇つて往く、景色は誠に好かつたが隧道に這入つてから弱つた、何しろ三哩もある隧道であるから向ふが眞闇で其隧道の中に籠つた黒煙が眞正面から吹付けて來る、さうすると向ふに幽靈のやうな青い火が燃えて居つてカチリカチリ音がする、それが子供の時なら幽靈と思ふが何しても少々氣味が惡くなつて來た、段々其所を通つて見るとカチリ〳〵音のして居たのは隧道の壞はれた所を工夫が修繕をして居つたのであります、何しろ十分許り隧道の中に居りましたので眼がくらんで來さうになりましたから終ひには眼を閉つて居つた、さうすると今度は降り始めた、非常に急な坂で前に辷り落ちさうでありますから今度は欄干につるさがつて居た(笑聲起る)さうして漸ッとチヤマンの次の停車場に着いて其晩は其處で泊つたが翌日車長がやつて來てまだ好い景色の所があるから觀る氣なら私がもう一遍働いて滊罐車の前に乘せてやるからと云ふことであつたが景色は十分に觀たからもう澤山だと云つて以前の市街に歸つて來ました、此チヤマンと云ふ所は英吉利の國境で五百戶ばかりの小さい村で貿易は何もない、毎日印度の方から一遍來るだけでありますが此處へ來て見ると英吉利の警備の一班を見るに足ります、此處の停車場はプラットホームが七つある、平日は用ゐないが露西亞と戰爭をする時には一日に七十位の列車を印度の方から送る、さう云ふ時には一ヶ所では間に合はぬから七つ程もプラットホームが出來て居るのであります、それから此處に一つの水道がある、其水道を百人許りの兵隊が常に守つて居る、これはどう云ふ譯であるかと云ふにイザ戰爭と云ふ時は其邊の土人が水道を壞はしたり又は水の中へ毒などを入れますからそこで兵隊が守つて居るのであります、それから又一つ大きな倉庫がありまして此中にはレールや滊罐車が一杯這入つて居ると云ふことであります、戰爭の時にはカンダハル迄鐵道を敷く積りであるさうでありますが今は鐵道を敷くことが出來ない、英吉利が敷かうと云つても鐵道を敷けば其國を取られるものと思つて居りますから何と云つても鐵道を敷かせないのであります、是から先五百哩も往かなければ波斯の國境に往くことは出來ないのであります、

旅窓漫吟

在米　金子筳下庵

○ヘンリー、ジョーヂが墓に詣でゝ

(一)

もゆるばかりのなさけもて、
君男々しくもさけびてし、
聲はなほ野にひゞけども、
貧富のけじめいまだしも、
ときがたくしてのこるなり。

(二)

世はいや闇とならんとし、
人はたともに喰ん時、
義人の跡を吾は今、
忍びながらにはからずも、
墓誌よむ眼なみだみつ、

○戀しき故郷

（一）

戀しき人のゐますてふ、
空はるかなり三千里、
あはれふる里吾がこゝろ、
飛てかなたにゆかん時、
あるはうれしくあるひは悲し。

（二）

人靜なる夕間暮、
唯だ一人して家をいで、
君思ひつゝ海邊をゆきぬ、
狂へる胸の耐えがたく、
聲はりあげて叫べども、
雲は漠々天際遠く、
水は茫々眼界ひろし、
磯うつ浪の音たかく、
大西洋岸風さむし。

松壽百話（一）

正起

余が父の名は正最で母の名は壽子といふたが晩年倶に茶事を嗜み父の茶號を松綠と呼んだが世の茶好きとは一風異ていたゆへ世間に行ふ茶禮の事を常に笑罵して居た事は余が記臆に存するを以て他日本誌に掲げて醉茶家の一醒劑となさん考へであるが夫はさて置き余が少年の頃學課の餘暇に友人と遊ぶのが第一の樂みで外出せんとする時に當り兩親の機嫌麗しき時には必らず呼止められ學課の試驗や昔し話をせられ外出の出來なんだのには大閉口で上の空で聞て居たゆへ大抵忘却して仕舞ひ耳底に存するものは僅に百分の一にも足らん位であるが今となつて見れば博覽强記な兩親であつたゆへ此方より進んで種々の話を聞て置たらと臍を噬でも高天原へ迎ひに往くことも出來んので實に殘念に堪んのである其の序に記臆して居る話の內學問の話は姑らく玉手箱へ秘藏し置き雜話を松壽百話と題して逐次掲載し學生諸子の參考に資する積りである

○三人寄れば文珠の智慧といふ此の語は論語の述而篇に三人

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

行必有二我師一といふに基因せし諺なり智慧と言んが爲めに文珠を引出せしものなり文珠菩薩は智者なり故に三人寄て事を議れば文珠菩薩の樣な智慧が出るといふことなり

○兄弟は他人の始りといふ事は初めは兄弟なれども兄弟の子の世となり孫の世となり曾孫の世となり玄孫の世となり世遷り人易る毎に次第に疎遠になり終には他人の如くになるを慨きし語なり

○尻尾を見せぬとは人をだましをふせて化の皮を現さぬことをいふ恰も狐狸が物に化て正體を見せぬにひとしきものを都て斯くいふなり

○鬼の念佛とは殘忍暴惡なる鬼の如き人が念佛を唱ふるは不似合なることゆゑ斯くたとへしものなり居家の念經といふも同じこゝろなり

○能書は筆を擇はずといふ語は虞世南が歐陽詢の傳に吾聞詢不レ擇二紙筆一皆得レ如レ志といへるに嚆矢す

○一升入る袋は一升といふことは如何程多く入れよふと思ふとも分相應より入れられぬといふことなり一足の足袋をいかて二人して履き得べきぞ無理な事を目論見たとて駄目で

あるゆへ分限を守るがよいといふことである

○ベテレヘムの星

ステフエンス作
ゆうび氣譯

過去の夜　あゝ暗し
　輝ける星あり　たゞ一つ
　其光天上天下　あゝ普し
あゝその星　高く東の空に
　輝くあゝ輝く　星宿を擧げて並ぶものなし
ヘテレヘムの星　永久に光あれな
　天軸碎け日月墮る日まで　あゝ光あれな

自殺論（下）

ショウペンハウエル
青柳有美復譯

嘗て論じて以爲らく、自殺は道德の最高理想なれども、倫理上必ずしも常に此く高尙なるものとして目する能はざる事情ありとせば、そは數々自殺の現世の苦痛を脫し來世の安樂に入らんとして行はるゝ恐れあるを以てなりと。然れども、

この意たるや、決して自殺を以て罪過なりと爲すに非ず。これに反し、今の所謂基督教國の僧侶が主張すところは、人をして自殺を罪過なりと信ぜしめんとするにあり。

それ基督教の根本義とするところは、十字架——即ち痛苦を以て人生の眞意義なりと爲すにあり。是に於てか、基督教は、自殺を以てこの人生の眞意義を遂行するに最も害あるものなりとし、之を排斥せんとするものゝ如し。されど、古人の見こゝに至らざりしが故に、自殺を以て更に忌むべきものなりとなさず、寧ろ之を榮譽あることなりとなせり。基督教にして若し此く自殺を以て痛苦を忌避するものなるが故に排斥すべしとなさば、是れ既に苦行の順德なるを認識せるものにして、實に歐洲の倫理學者が未だ曾て唱道せざりし至高の倫理標準に到達せしなり、此る至高の倫理標準に據るに非ずんば、自殺は決して排斥せられ得るものに非ず。然るに唯一神教の僧侶の自殺を攻擊するや、たゞ狂熱あるのみにして、以て根據と爲すべき聖經の文言あるに非ず、又堂々たる論議の之に伴ふにもあらざるが故に、その攻擊の眞意の果して那邊にあるやを知るに苦む。されど、それ或はたゞ『萬物よからざる無し』と宣言せる教義に反かんことを恐るゝに非るなき乎。果して然らば、是れ實に惟一神教得意の漠然たる樂天觀なり。

人の自ら其生命を絕たんとするや、必ずまづ生活を恐怖すること死を恐るゝに勝れる時に至りてす。されど、人の死を恐るゝの念たるや、實に激甚なるものにして、死は恰も現世よりして來世に至る要關を守備する衛兵の如く、嚴然として漫に人の通過を許さず。もし死することにして頗る容易ならんか、恐らく一人として生をこの世に欲するものなく、地上早く既に人跡を絕ちたらんか。されど、死は容易の業に非ず。死せんとするものは、まづ其身體を毀たざるべからず。これ人たるものゝ厭ふところなり。蓋し、人の身體は是れ生活慾の權化なればなり。

されど、死を恐るゝ念慮と戰ふことは、實際に臨んで、必らずしも之を局外に於て觀察する如く、しかし難事に非ず。これ心身の痛苦各互に相制すればなり。今もし吾人にして激烈なる苦痛を其身に感し、或は又一種の苦痛永く繼續して肉身の上に加へられんか、更に新らしき苦痛に遇ふも、決して

之を感知することなく全く無神經なり、たゞ速に現在の苦痛より回復せんことを祈るのみ。

此くの如くにして心神の大苦痛は、吾人を驅りて身躰の苦痛に無感覺なるものたらしめ、これを意とせざるに至らしむ。しかのみならず、若し心神の痛苦にして身躰のそれよりも更に甚しく、吾人を懊惱煩悶せしむるが如きことあらんか、この心神の痛苦を脱せんとして、却て身躰の苦痛を歡迎するものなり。これ即ち自殺をして容易ならしむる所因にして、自殺に伴ふ身躰上の苦痛の如き、激烈なる心神の痛苦ある人に向つては、全く何等の恐怖だも惹起さゞるなり。殊に妄想性憂鬱症の人に於て然りとす。此種の人々は特に死に對する恐怖心を消磨せんとして務むる如きことなくも、その看護者にして、しばし傍を離れんか、忽ちにして命を絶つを常とす。

吾人もし惡夢を見ば、其驚愕悲歎の絶頂に至りて、即ち之が爲に醒まさる。醒むれば夢中の魆鬼魍魎又忽ちにして消え、其行くところを知らず。此くの如くにして人の一生又是れ南柯の一夢なり。即ち驚愕悲歎の絶頂時に及べば、吾人は勢ひこの人生の夢を破らざるべからざるに至り、玆に始めて往生安樂す。

自殺は又一種の經驗にして、人は、これによりて、死の、我が生命と我が觀察眼とに及ぼすところ如何を知るべきなり。されど、これ得るところ無き經驗なり。蓋し、その大に知るところあらんと期しつゝある意識は、即ち其經驗によりて絶滅せらるべければなり。

（了）

○新年の不相變

聖人といふても、孔子や基督のことでは無い。無論そういふ聖人になるのは六ケしいでせうが、羅馬舊教に所謂聖人、平たくいへば世を棄てた坊さまのエライのになるのも、仲々に六ケしいそうで、一ト通りや二タ通りの苦みでは無いといふことですが、近頃佛蘭西で名代の批評家兼詩人アナトール・フランスといふ先生が『ル、リーヴル、モンナミ』と申す書を著して、自分の聖人志願で修行してた時分の經歷を述べてます。

已見氷澌流碧水

遙如春色滿皇州

○新年の不相變

一少年

新年といひても新らしきこともなきが例なれども今年ほど新らしきこと無きは無類なり。屠蘇に醉ふ人も見受けず、飲みても醉はぬなるべし。紙鳶の上り樣も低く、羽根の飛ぶも鈍きが如し。人心萎靡、四方不景氣、近年に見ざる爲躰、如何んとも爲しかねたるの狀なり。ひとり快心の事は、迴向院の相撲なり、凛たる勇士のおもかげ、只だ此の場に於て一端を見る。其他滔々たる平凡、此も彼も一向に面白きことなし。機宜は常に失し、彌縫は斷えず繕ろふ。何處に行くもハイカラの勇氣にて、寧ろ蠻勇に戀ひ慕ふ。此の厭氣と、眠氣とを攪破して、一刀裁斷の新氣勢を起すもの何處にありや。

○鬼一法眼の秘書

鬼一法眼より源義經へ傳へたる極秘の書といふもの如し左

大事の所へ出向ふに、先づ手につばきして見よ、泡のたつは大吉なり、泡のたゝざるは惡し、愼しむべし。

他へ出向ふに、鼻ひるならば、誅放にあふべし。

大切の場所に出向ふに、鳥糞を仕掛たらば、速やかに洗ふべし、惡きと知れ。

我家の鷄、宵なきしたる時は、七日の內に家內に大小の災ひ出來るものなり、若し七日過ぎたらば、廿一日に來る、愼しむべし。

朝日に向ひ形を見るに、形より上のなきは、其日の內に死するとあるべし、腰の合切れたらば、災難に逢ふと知るべし。

鯨波の聲を以て勝負を知る事、其の聲の天にひゞくは負と知るべし、地に響くは勝つべき也。

春夏秋冬。春夏は左の脉、秋冬は右の脉されて無き時あれば大事にあふべき也、又俄かに胸さはぎすると惡しきと知るべし。

大事の場へ出る時、馬はねて落たる時、馬は玉女の方へ引向けて見るに、口を上るは敵を討つ、口を下るは負るなり、轡に向ひてむらをあてゝ摩利支天へ祈念すべし。

內にて具足を取出るに、左の手にて請取は忌むなり、右にて取るは大吉なり。

所云る寅の卷とはかゝるもの也。

新　文

○春　潮　（田山花袋作）

此の書一の戀愛小說であるか著者仲々以て着眼點が緻密で而して餘程の感情がだと見えるだから文章が至極面白く愉快に感ずるのみならず流暢であるから呆(あき)が來ないのは著者たるものの功である、學生社會の眞情は確かに明かに寫されてある先ず强いても讀ませ度きは突飛な靑年學生と現今の女學生である、何んと感じられるやら。

○少　年　（時事新報日發行）

紙質佳良と挿畫の鮮明にして精細なのは他に見られない、記事は他と大差なきも只動植物の寫眞畫を載せられて說明が嘶體になつて居るので自然讀む氣になる從つて此れ等を知る事が出來るので小學生徒には好適當な雜誌であらう博文舘の少年世界とマア競爭だらう惜むらくは表裝の配色がよくない。

○四季料理　（嘉悅孝子著）

體裁頗る美て日本料理は云はずもかな西洋御料理、支那御料理、說く所至極丁寧親切實地的て、名さい六つヶ敷き器具を要せす何方にも行ひ易く、時節柄割烹に志あるもの丶世の奥樣たるもの、座右に備へて可なり。

○牧　草　論　（小川二郎著）

牧草を論じて二百四頁に餘る。これ既に其大著述なるを證す。著者の言に依れば將來は耕耘に牛馬の力を使用すること發達すべきを以て、益々牧草の耕作に力を貸すこと多からざるべからずと云にあり。而して、又著者の說に依れば、最も經濟的なる牧草養作法はクロバー類とチモセー類とを混播するにあるもの丶如し。全編の結構凡て精確にして、しかも、文多く通讀にイヤ氣を催さしむる如き點なきは著者の技倆といふべきなり。（札幌興農園藤販）（正價五拾錢）

○近事畫報　（近事畫報社發行）

近來日本人の情心愈々進み讀書を厭ふの情甚しくなると共に、繪畫によりて書籍より得ると同樣の利益を得んことを望むに至れり。近事畫報は即ち實にこの要求に應ずるものなるを以て、近時の實行驚くべきものあり。（一冊廿五錢）

○初等英語　（東枝律書房）

英語雜誌の發行せらる丶もの多しと雖ども、多くは繁に過ぎ雜に流る。『初等英語』は即ちこの弊より免れて、初學を利するところ多し。（一冊六錢）

○『開國五十年』

聖路易萬國博覽會は、日本を世界に紹介する好時機なり。是に於てか「英文新誌社」主催となり、大隈伯爵を編修總裁に仰き、新渡戶博士主筆の任に當り、櫻井鷗村津田梅子松田順平阿波松之助の諸氏專ら盡力し、日本に於ける英米勢力の影響を紹介する企あり。此書題して「開國五十年」といふも、英譯は“Anglo-American Influence in Japan”と稱すと。

○副島八十六氏の南洋土產

副島氏一たび南洋に渡り、ジヤバ附近の探險を終へて歸りしより、氏は日本に於ける同島の人文と地理とのオーソリテ井ーたるに至れり。最近の探險談「南洋土產」と題して「人民」新聞にあり。世上の南下思想庶幾くはこれによりて發展誘發せられんか。

○銀月の文

萬朝紙上近時の異彩は、銀月の文なり。團洲死せし時の門下門外の涙の解剖論より、好俳優河野庶中の贅に至るまて、一種の着眼、一種の情筆、他に容易に見るべからざるもの也。人情の機微に觸れて、而して淨瑠璃文に精わしきもいに非れば、決して此の能手を得ず。

○板垣翁の告白文

此翁の文亦た涙の文なり、妄りに官臭とするとなかれ。之に泣かざるは、末路英雄に對するの情にあらず。

○木下尙江の小說

明らかに署して云く、木下尙江。而して、題して云く、火の柱。此の題、此の人鶴首して其の繼續に注意す

○新聞の紙旗

今の新聞紙は、喩えば萬軍の旗印なり。各社の競爭奮鬪、近時の如く男ましく且つ忙がしき、傍觀者をして快ならしめ又狂ならしむ。其の相競ふとの活潑近時の如きは少し。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

○近衛公薨

嗚呼、近衛公薨ず。名門の偉器、朝野共に其の將來に仰望せしに、今ま遂に之を失ふ。天上悲しき雲あり。平野、何處にも露を懸く。目白臺上、學習院の經營未だ成らずして、天王寺畔、既に荼毘の煙を見る、豊圓なる斯公今ま在らず、寛濶なる斯人復た見がたし。然りと雖ども、學習院内に扶植したる公の感化は、異日必らずや勃發し、永く公の餘德をして朝野に煥たらしめん。吾人はくれ〲も之が爲に公を懷惜すると切なり。

○徳川公爵

近衛公は貴族院議長の年期恙なく了られ、尙ほ再勤せしめらるゝやの御思召もありつらんに、其病の故を以て突如として徳川公爵代らる、衆、或ひは意外とせし向もあらん歟なれども、決して異數にあらず。曩に、公衛公の文相たるべき内囑を受らるゝや、之を辭せり。則はち、次に徳川公に擬せらるゝや、公も亦た辭せり。徳川公は、或る意味に於て近衛公に弟續せらるべき關係あるべし。今や、既に貴族院議長として公平大量の威望を見めさる、惟ふに次に學習院長たるべきものも、亦必らずや斯公なるべし。

○近衛及徳川家

名門の天賚積誠の餘りに成る、寵遇祝福もと偶然にあらざる也。近衛家、重代、勤王と平民主義との權化なり。徳川氏たるもの、亦尤とも勤王に篤く、維新前後の壯士の非難せしが如きものにあらず。殊に今の公爵は吉宗將軍の裔にあらずや。惟ふに、今後大いに名を成すもの、夫れ斯公か。

○皇室の藩屏

皇室の藩屏とは昔日の事なり、今は藩屏なきを祈るこそ、華人の任ならずや。大公至正、黨別の觀を超越し、直ちに萬民をして皇室に直隷せしむるとに介する。其の任ならずや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○安井哲子女史

嗚呼、女史サイアム皇后に聘せられ、近日將に赴任せんとす清秀高潔の資、重任双肩にかゝれり、乞ふ自愛自重せよ。

○嫉妬は女の病か

ちかごろ『讀賣新聞』に『小間使日記』なるもの連載せらるいづこの家庭を寫せしものか知らねど、奥樣の嫉妬深きことあり〳〵と書かれて、あゝ嫉妬は女の疾なるかと嘆又嘆ならざるを得じ。總じて今の女ほど嫉妬深きは無し。昔の女とて敢て嫉妬心これ無かりしといふにはあらねど、多くは皆な之を愼み隱くしたれば、其外に顯はるゝこと、甚だ稀なりしが、今の女はこの病癖を愼む心薄く、遠慮會釋もなく、ドシ〳〵之を現はし、夫の眼の前にブラつかするを以て、今の夫の苦みは昔の夫のそれに數十倍す。しかも、嫉妬せぬを女の沽券をさげし如くに思ふこと、以ての外の心得違ひなり。嫉妬は是れ人性の本能にして德に非ず。かくムラ〳〵と起り易き本性を抑ふること、是れを誠の女德といふ。

○東京の關西式

昔の江戸魂が漸く東京人の胸を離れて、今や江戸子氣質あるもの少なく、東京のほん眞中に本郷村神田村などいふ田舍を現ずるものありとは、かねて聞くところなりしが、近頃に至りて東京は著しく關西化せらるゝ傾向あり、片岡我當まづ歌舞伎座に來りて切りに大阪臭を撒きちらし、燒芋屋に西京燒の看板揭げられ芝居小屋の前には怪しき『正一位稻荷大明神』然たるノボリたてられ、年の暮の賣出しにも又競つて店頭に旗ノボリの類をブラ下げ押し立つ。是れ皆な關西式なり。かの煙草の廣告旗の如き是れ又實に關西式なり東京に於ける關西の勢力も是に至りて驚くべきなり。されど、是れ東京が近頃に至りて著しく抵抗力を失へるを意味するものにして、必ずしも、獨り之を交通機關の發達せるものあるが爲めのみに歸すべからず。なほ又、博覽會なるものが、再び關西の中心地に開かれたる一事は、最も東京を關西化するに預りて力ありしものゝ如し。蓋し、是れよりて江戸人の注意を關西に惹くこと强ければなり。

霊薬効驗錄

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

リウマチズム靈藥効驗錄

◉前山口縣知事武田千代三郎氏の來書に曰く……御調劑のリウマチス特効藥早速御送り下され難有存候。早々家内に服用致させ候處、僅か二粒にて効驗相現はれ、熱も去り痛疼も消へ失せ、積年の持病一朝にして全く平癒いたし、餘り不思議にて、うそかと思はれ候位に御座候。かゝる靈藥あることを知らず、到底全治の見込なきものと諦らめ居候處、今度び偶然の事より御近づきに相成り、御蔭にて多年の宿痾を絶つを得たるは、實に何より天幸に御座候。荊妻が此病を獲候は、先年神戸在住中にて、急性リウマチスとか申して、忽然發病、約一ヶ月程大苦しみ致し、幸に醫療の効にて一時は平癒いたし候樣に見へ候處、其後慢性と相成候と見へ、年々梅雨中は申すに及ばず、其他の季節にても雨天の兩三日も續き候へば、忽ち發病するを常といたし居候處、此度御蔭樣にて根治し得たるならんと大に悦び居候。一日おきとの御指示も有之候得共、初服より中二日を隔て第二劑を服用いたさせ候。然るに其頃より効驗相現はれ、終に第三劑を用うるに及ばずして全治致候。承り及候へば、他にも御投劑にて治療致候方々多勢有之候由誠に不思議の靈藥と申すべく、かゝる靈藥を御手許に秘し置るゝは惜むべき事に御座候へば、廣く之を世に公にせられ、該病に苦しめる人々を救はれ候ては如何かと御勸め申上候。先は御禮迄如斯御座候。敬具(卅六年八月五日)

◉大日本女子大學校教授戶川殘花氏女道子君の來書に曰く……明治卅六年一月中旬より服用いたし、九粒にて全快いたし候。リウマチズムは兩三年前より手首に痛を發し困難いたし候もの故、靈藥を用いて大きに快よく相成り休藥せし處、又々再發致し再度服藥都合九粒丈け相用候處、神の如く快癒いたし候(卅六年九月七日)

◉經濟雜誌主筆布川孫市君の來書に云く……小生が妹眞子數年來リウマチズムを患ひ種々醫藥を試ろみ候へども、更に其効果無之、近來は殊に重症に陷ゐり、室内の歩行すら困難を感じ候に付、人の勸めに從ひ、さる温泉に入浴せん爲め參り候處、途中病勢つのり止むなく歸宅仕候。右の事情圖らず御話申上候處、貴兄には秘藏の良藥有之候趣にて、一劑頂戴早速試用せしめ候處數日にして全快、爾來再發不仕、今日尚ほ健在に候。御秘藏の良藥服用候ものは、悉皆全快せられ候趣は、かねて拜承候得共、今度愚妹に服藥せしめ、其効驗の著ぢるしき今更の樣に感服仕候。右御禮かた〴〵敬具(卅六年七月十日)

◉其他同樣の感謝狀數十數通あれども略す。

王子病院出張所
東京市神田區三崎町三丁目一番地(東京座角)
(電話番町一〇〇一)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

（明治卅七年一月十五日發行）（毎月二回十日廿五日）

リウマチズム靈藥

リウマチズム靈藥の記

余の少時米國に留學して恩師シーレー先生の許に寄寓するや、先生の余を見る恰かも家人の如く、萬里異邦の孤客をして溫然慈母の膝下に在るが如くならしめき。後ち別を惜んで一旦歸朝し、去々年復たび西航し、吾舊師の家を訪へば、舊師夙に去つて隔世の人と爲る。余痛恨に堪へず、追慕低徊して數夜故人の室に眠り、端なくリウマチズムを病む。先生の遺子にして當年の余が同窓者親しく看護して一家秘傳の靈藥を惠まる。頓服一粒にして病忽然として療ゆ。余驚愕し其秘方を問へば、先生の遺子笑つて曰く、之れ實に先人君に遺すの紀念ならんと。悉とく其秘劑を傳授せらる。余歸朝の後、先づ故舊親戚に試むるに、皆な神効あり即ち漸次に他の傳聞するものに分與するに、百服百中、眞に靈助あるに似たり。此に於て舊友王子病院主石川光孝氏に乞ふて、配劑を托し、廣く一般世人の需に應ずることゝはなしぬ。若し之によつて救世治療の小功あらば、皆是れ恩師の賜なりと云ふべし。

明治癸卯の冬

東京巣鴨村
明治女學校内　川井運吉謹識
（電話番町一〇〇一番）

○

舊友川井君米國より齎らす所の靈藥を試みに用ゆるに効驗神の如く、眞に他に比類を見ず。因て同君の委賴に任せ余が王子病院の配劑とし其實價を以て廣く世人の需に應ず。

明治癸卯の冬

王子病院々主　石川光孝

王子病院出張所（神田三崎町三丁目一番地）

毎月一回

青年界

青年必讀無類雜誌

材料豐富趣味油然

一冊廿錢

發行所

東京日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂書籍株式會社

新刊

續有美臭

青柳有美著

近かく煙草やを出せる有美の氣焰更に昔日に數十倍す。惡魔主義の眞意を知らんと欲せば、三更月を踏むに及ばず、白貲卅五錢を投じて斯の書を購へ、但し郵税は四錢なるも、日本第一名優市川女寅閣下の題字あり。豈に廉からずや。

發行所

東京本郷四丁目五番地

文明堂

社告

新設出張所

出張所

東京市神田區三崎町三丁目一番地卅二號

女學雜誌社

御寄送の新刊雜誌書籍類は右記宛に

（明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY